

私とは誰か

野田俊作（大阪）

要旨

キーワード：

あなたはもはやおわかりでしょうが、
すべてのものは宇宙のなかに存在し、
宇宙はすべてのもののなかに存在するのです。
われわれは宇宙のなかに存在し、
宇宙はわれわれのなかに存在するのです。

（ジョルダノ・ブルーノ）

0. 問題の所在

われわれはふだんライフスタイルに従って行動しているわけですが、しかしライフスタイルがわれわれの行動を決めているわけではありません。それはたとえば言えば、裁判官は法律にしたがって判決をくだすわけですが、法律が裁判官を動かしているのではなくて、判決をくだすのはあくまで裁判官であるのと同じようなことです。このたとえでは、裁判官が個人、法律がライフスタイルに相当します。つまり、個人がライフスタイルを参照し使っているわけです。

しかしながら、私の個性はライフスタイルの個性であって、ライフスタイルがなければ私は私らしくなくなってしまいます。とすると、日常語でなんとなく「私」と言っているのは、ライフスタイルのことをいうのでしょうか、あるいは個人のことをいうのでしょうか。これは実はかなりやっかいな問題なのですが、西洋哲学の流れをふり返りながら、このことについて少し考えてみようと思います。そこからいくらかわかってくることもあるように思うのです。

1. デカルトと機械主義

• デカルト的自我

「私とは誰か」という問いは、哲学的に言うと「自我(ego)」あるいは「自己(self)」についての問いなのですが、これについて考えるには、まずデカルト(René Descartes, 1598-1650)に遡らなければなりません。よく知られているようにデカルトは、「私は考える、ゆえに私は在る(Je pense,

donc je suis.)」と言いました。このことについてもう少し調べてみましょう。

デカルトは次のように書いています。

私はある、私は存在する。これは確かである。だが、どれだけの間か。もちろん、私が考える間である。なぜなら、もし私が考えることをすっかりやめてしまうならば、おそらくその瞬間に私は、存在することをまったくやめてしまうことになるであろうから。(中略) 厳密に言えば、私とはただ、考えるもの以外の何ものでもないことになる。いいかえれば、精神、すなわち理性、すなわち悟性、にはかならないことになる。^[6], p.247)

まず、デカルトは、「考え(思惟)」は確かに在るのだから、その主語である「考えているもの(自我)」も在るはずだと考えて、思惟と自我とを分離します。この考えの筋道はかなり怪しくて、後で述べるようにニーチェなどが激しく批判するのですが、いまはさしあたってデカルトの言うことにしたがって、自我の存在を認めておきましょう。

こうして思惟と自我を区別したうえで、思惟はたえず変化するが、自我は変化せず、同一に連続していると考えています。さまざまの考えが起こっては消えていくが、それを考えている私はずっと同じ私だということです。このような自我の同一性と連続性は、それ以後の西洋哲学者が自我について考えるときの、ほとんど自明の前提になっていきました。

さて、デカルトが言う自我は、アドラー心理学が言う個人に似ているでしょうか、それともライフスタイルに似ているでしょうか。あきらかにライフスタイルにより似ていると思います。自我は変化せずに同一性を保ちながら思惟を生み出すのですが、ライフスタイルも、ある年齢以後は変化せずに同一性を保ちながら行動を生み出します。一方で、自我は人間の全体ではなく一部分ですし、ライフスタイルも人間の全体ではありません。(図1参照)

実際、アンスバッハー(Heinz Ansbacher)は次のように述べています。

アドラーの著作の中で、ライフスタイルは、以下のようなさまざまのものと同一視されている。すなわち、自己(self)あるいは自我(ego)、人格(personality)、個性(individuality)、創造活動の個性的型(individual form of creative activity)、自己と人生の問題についての意見(opinion about one-self and the problem of life)、人生に対する全般的な態度(whole attitude to life)、など。^[1], p.174)

こう考えると、デカルトの哲学には、アドラー心理学でいう個人に相当するアイデアが欠けている、ということがわかります。言い方を換えると、デカルトに「私とは誰か」と尋ねたら、「それは自我(ライフスタイル)だ」と答えるであろうということです。フロイト派の心理学者なども同じように答えるでしょう。彼らはアドラー心理学がいう個人のようなアイデアをもっていないから。

この点については後でもう一度とりあげることがありますが、ここではデカルトの自我の概念

	同一性を保つ		絶えず変化する
デカルト	自我	→	思惟
アドラー	ライフスタイル	→	行動

図1 デカルトの自我とアドラーのライフスタイル

からどのようなことが出てくるかを、もうすこしたどっておきたいと思います。

• 物心二元論

デカルトは物心二元論者で、世界を精神界と物質界に二分して考えました。そのうえで、人間の身体もまた物質であり、自然界の規則である物理法則に従って動いている機械のようなものだと主張します。彼は言います。

人間のくふうがいろいろな自動機械を数多くつくりうるのを知る人々（中略）は、人体を、神の手によって作られたゆえに、人間がつくりださうほどの機械よりも、比較にならぬほどすぐれた秩序をもち、かつみごとな運動をみずからなしうところの、一つの機械とみなすであろう。^[5],pp.205-206)

人体が、あるいは動物が、機械であるとする、生命とはデカルトにとってはいったい何だったのでしょうか。彼は、動物精気(spiritus animales)というギリシア医学以来の概念で説明しようとしませんが、彼によればそれは消化された食物の液ないし血液のことです。つまり物質なのです。こうして、人体も動物精気もともに物質界の存在であり、従って生命は物質界のできごとなのです。デカルトにとって、生物を含めた世界は、究極的には「死んだ」物質であるにすぎません。

次に、彼が言う精神とは、人間的な精神、すなわち理性のことであって、理性以外の、動物にも見られるような精神活動は真の意味の精神であるとはいえず、物質界のものだと考えます。彼は次のように書いています。

人間ならばいかに鈍い愚かな者でも、またおそらくは気の狂った者でも、さまざまなことばを集めて配列し、一つの談話をつくりあげて、自分の考えを他人に伝えることができるが、反対に、他の動物にはいかに完全でありいかによい性質をもって生まれていても、同じことができるものはない。（中略）そしてこのことは、動物が人間よりも少ない理性をもつ、ということを示すのではなくて、動物が理性をまったくもたない、ということを示しているのである。（中略）それはむしろ、彼らが精神をまったくもたず、彼らのうちには自然が彼らの諸器官の配置に従ってはたしているのだ、ということを示明するのである。あたかも時計が、車とぜんまいとだけから組み立てられているにもかかわらず、われわれが知恵をしぼってもおよばぬ正確さで、時刻を数え時間をはかることができるようなものである。^[5],pp.207-208)

このように、デカルトがいう精神とは言語活動する理性のことであり、それ以外の精神活動、たとえば知覚や感情などは、精神界のものではなくて物質界のものであることになります。

こうして、言語的な理性だけが精神的なものとしてとりだされます。理性とは自我ですから、自我以外のすべてのものは物質界の存在であることになります。思惟も言葉も、理性そのものではないので物質界の存在です。理性そのものは対象として認識できないので、科学的分析の対象になりませんが、それ以外のすべての精神

精神界	物質界		
	自我	思考 感情	身体
生 物			無生物
こ ころ	か ら だ	も の	

図2 デカルトの物心二元論

活動、すなわち、感情はもとより言語や思考も、物質界に属するものになりますので、科学的な分析の対象になるわけです。(図2参照)

• 世界の物質化

ここで、「物質界に属する」ということの意味を調べておかなければなりません。それは「自然科学の法則に従う」という意味です。つまり、デカルトは、人間精神を、自我を除いてすべて、自然科学で説明できると考えたのです。こうして、自我を除く世界は自然科学化されました。

むしろ、すべてを自然科学で説明することが目的で、それでデカルトは自我以外の何もかもを物質界に属すると分類したと考えるべきでしょう。これは歴史的事情を知らないとわかりにくいかもしれません。よつつの理由が考えられると思います。

ひとつ目の理由は、中世後期以来「二重真理説」という学説が一般に認められていました。これは、信仰の真理と理性の真理は別のものだという説です。つまり、宗教的世界の真理と物質的世界の真理とは別のものであって、科学者が物質的世界の法則を研究している限り、宗教的なタブーに抵触することはないという考え方です。そこで、デカルトは、物質的世界の範囲をできるだけ広げておきたかったのだと思います。

ふたつ目は、中世には、天上界で成り立つ法則と地上界で成り立つ法則は違っているとか、無生物界に成り立つ法則と生物界に成り立つ法則は違っているとか考えられていました。ところが、ケプラー(Johann Kepler, 1571-1630)やガリレオ(Galileo Galilei, 1564-1642)が、惑星の運動も地上の物体の運動も同じ原理で説明できることを証明しましたし、ウィリアム・ハーヴェイ(William Harvey, 1578-1657)が血液循環を明らかにすることを通じて動物の体内でも無生物と同じ法則が通用することを証明しました。その結果、世界全体が、天文現象であれ地上の運動であれ生物のしくみであれ、ただひとつの法則で説明できるはずだと、学者たちは考えるようになりました。これが、デカルトがすべてを物質界に属すると言いたかったふたつ目の理由です。

みつ目は、デカルトより少し前に、教会はジョルダノ・ブルーノ(Giordano Bruno, 1548?-1600)を死刑にしました。理由は、ブルーノが、自然がすなわち神であり神がすなわち自然であると唱えたからです。このように自然と神が一致するという考え方は、キリスト教世界では、神が自然の秩序の外に出られないということを論理的に導くことになり、神の無限性や全能性を否定することになるので、異端だとされたのです。ですから、デカルトは世界に精神が宿するという議論を慎重に避ける必要がありました。そこで、すべてを物質界に分類したかったのです。しかも、神から与えられたことになっている魂、すなわち理性、は、精神界のものとして確保しておかなければならなかったのです。そこで、ほんのすこしの領域だけを理性という精神界に分け与えました。このようにしておけば、理性そのものは分析の対象にならなくても、思考も感情も生命も、すべてが科学的分析の対象にでき、しかも汎神論的でないので教会との折り合いもよいのです。これがみつ目の理由です。

よつつ目は、もっと実際的な理由ですが、自然科学は当時すでに技術を生み出し始めており、その力で世界を支配することをデカルトは夢見たのです。彼は言います。

それらの一般的原理が私に教えるところでは、人生にきわめて有益なもろもろの認識にいたることが可能なのであり、(中略)これによりわれわれは、火や水や風や星や天空やその他われわれをとりまくすべての物体のもつ力とそのはたらきとを、あたかもわれわれが職人たちのさまざまなわざを知るように判明に知って、それらのものを、職人のわざを用いる場合と同様それぞれの適当な用途にあてることができ、かくてわれわれ自身を、いわば自然の主人か所有者たらしめ

ることができるのだから。〔⁵〕,p.216)

こうして近代が始まったのです。

• 個人の客体化

デカルトのおかげで、心もまた自然科学的に分析することができるようになりました。心の働きを観察測定しそこから科学的な法則を発見しようとしたのが心理学ですし、さらにその根底にある脳の物質代謝を科学的に調べようとしているのが精神医学です。それは、デカルトが予言したように、たしかに一定の成果を上げてきました。

こうして心が自然科学によって説明されていくうちに、物質的法則が人間を動かしているのだと信じられるようになりました。物質的法則といっておかしければ、たとえば感情（それはデカルト的には物質界のものであり、物質的法則に従うものなのです）が人間を動かすとか、記憶（これもまた物質界のものであり、物質的法則に従うものなのです）が人間を動かすとか、神経伝達物質が人間を動かすとか、遺伝子が人間を動かすとか、そういった考え方です。アドラー心理学的に言うと、これは「Xが個人を動かす」ということで、個人の客体性です。つまり、デカルト的物心二元論は、論理的必然として、個人の客体性を引き出したのです。

このようなデカルトの態度を、人間理性の特異性を強調する点からヒューマニズム（人間主義）だのとらえる考え方もありますが、むしろ理性以外のすべての精神活動を物質的法則で説明しようとした点でメカニズム（機械主義）だのとらえる方が正確であると思います。実際、デカルトは言葉の端々に人間が精巧な機械であることを示唆していますし、後にド・ラ・メトリエ（J.O. de La Mettrie, 1709-1751）がデカルト主義の延長線上に『人間機械論』という本を書きました。こうして、世界は物質化され、生命は機械化され、個人は客体化されたのです。

2. ニーチェと人間主義

• ニーチェ的自己

さて、ライフスタイルがデカルト的自我に相当するとして、個人とは何かということを宿題として残しておきました。これを理解するためには、デカルト的な自我論とは別に、ショーペンハウアー（Arthur Schopenhauer, 1788-1860）やキルケゴール（Søren Aabye Kierkegaard, 1813-1855）を経てニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900）に至る、意志的な自己論の系譜を参照する必要があります。このうち、アドラーと深く関係するのがニーチェです。しばらくニーチェの意見を聞いてみましょう。

思想というものは、〈それ〉が欲するときややって来るもので、〈われ〉が欲するときに来るのではない。したがって主語〈われ〉が述語〈思う〉の条件であると主張するのは事実の歪曲である、ということだ。要するに、〈それ〉が思う、だがしかしこの〈それ〉をば、ただちにあの古くして有名な〈われ〉だとみなすのは、控え目に言っても、一つの仮定、一つの主張にすぎないもので、ましてや〈直接的確実性〉などでは決してない。（中略）ここでひとは文法上の習慣に従って、「思考とは一つの活動であり、すべての活動には活動している主体がある、されば…」という式に推論しているのである。（⁹〕,pp.40-41）

このように、ニーチェはデカルトを激しく批判します。仮に「思惟している」ということが確実であるとしても、それを根拠に、その主語である「私」が存在すると主張するのは、「主語Aが動作Bをする」というヨーロッパ語の文法形式からの推論であるにすぎず、それ以上の根拠をもっていないので、デカルトが言うように、「私は考える、ゆえに私は在る」とは言えないというのです。

そうであるとする、理性である自我が精神界、それ以外の一切が物質界であるというデカルトの二元論は根拠を失います。デカルトが物心二元論を主張したかったのは、実は物質世界だけではなく生命をも精神をも物質的な法則で説明できるようにするためであったとすると、それについても根拠が危うくなります。ニーチェは言います。

「自我」ときみは言い、そしてこの言葉を誇りとしている。だが、より大いなるものは一きみはそのことを信じようとしないが一きみの身体であり、そしてきみの身体の大いなる理性である。この大いなる理性は、自我を言わないで、自我を行為するのだ。^[8],p.61

このような身体のことをニーチェは自己と呼びます。

きみのもろもろの思想や感情の背後に、わたしの兄弟よ、一人の強大な命令者、一人の知られざる賢者が立っている—この者が自己と呼ばれる。きみの身体の中に彼は住んでいる。彼はきみの身体なのだ。(中略) 創造する自己が、みずからのために、尊重することと軽蔑することとを創造した。それが、みずからのために、快楽と苦痛を創造した。創造する身体が、みずからのために、自分の意志の一つの手として、精神を創造した。^[8],pp.62-63

アドラーは、このようなニーチェ的な自己を、心理学用語としての自己との混同を避けるために、個人と呼ぶことにしたのだと思います。ですから、個人がライフスタイルを使うというのは、ニーチェ風に言い直すと、自己が自我を使うということです。

さらに、自我について、ニーチェは「遠近法(Perspektiv)」ということを行います。これは、アドラーの「認知バイアス」に似たアイデアです。

総じて「認識」という言葉が意味をもつかぎり、世界は認識されうるものである。しかし、世界は別様にも認識されうるものであり、それはおのれの背後にいかなる意味をももってはならず、かえって無数の意味をもっている。—「遠近法主義。」^[10],下,p.27

このように考えてくると、アドラーの人間モデルはニーチェのものをかなり忠実に写し取ったものであることがわかります。(図3参照)

●主体としての個人

デカルトの自我とニーチェの自己を比較してみると、デカルトの自我は、ただ思惟しているだけの存在でしたが、ニーチェの自己は創造的に行為する存在です。こう考えたとき、もはや個人は物質運動の結果ではな

デカルト	?	自我	行動
ニーチェ	自己 (力への意思)	自我 (遠近法)	行動
アドラー	個人 (目的追求)	ライフスタイル (認知バイアス)	行動

図3 デカルトとニーチェとアドラーの人間観

くて、みずから意志しみずから決断する、真に主体的な存在として、再定義されるのです。ニーチェは、こう言います。

およそ生あるものは、何はおいてまず、自らの力を発現しようと欲するものだ。生そのものが力への意志なのだ。^[9],pp.35-36)

ニーチェによれば、生きるとは意志することです。そのような根源的な意志が、われわれの日常の諸活動となって具体化するといえます。これはアドレリアンにはおなじみの考え方です。すなわち、目標追求性という、相対的マイナスから相対的プラスへの、ニーチェ風に言うなら「力への意志」が、人間の生命の本質であり、そこから人間のすべての活動が生み出されるのです。

ニーチェ的な力への意志は、生きる意志そのものであり、精神的なものと言うよりはむしろ身体的なものです。人間の全身が意志をもって生きていくのです。アドラーが、このような意味で個人を考えていたことは明らかだと思います。デカルトのような、物質世界のかなたに極小化され、ただ自分が思惟しているのをなすすべもなく眺めている理性的自我ではなくて、具体的な身体として今ここにあらわれている個人を考えていたのでしょう。

そのような個人が自我としてのライフスタイルを使います。自我であるライフスタイルは、個人の一部であるにすぎず、デカルトが言うような実体でもないし理性でもなくて、生への意志が使う道具であるにすぎません。こうして個人の主体性が回復されました。

こうして主体としての個人、ニーチェがいう自己、の存在を認めると、デカルトが言うような、唯一の自我が同一で連続しているという仮説を鵜呑みにすることができなくなります。個人は必要があれば自我（ライフスタイル）のあり方を変容させてもいいわけですし、あるいは必要があれば複数の自我を用意して使い分けてもいいわけですから。こうして、個人の主体性を認めることによって、ライフスタイルを変容させることが理論的に可能であることとなりますし、私が提唱している複数のペルソナ（自我）^[12]も可能であることとなります。個人はつねに統一的全体であり同一で連続なのですが、その具体的なあらわれとしてのライフスタイルは同一でないかもしれず連続していないかもしれないのです。われわれのライフスタイルが同一で連続しているように見えるのは、さしあたって個人がそのようにしようと決断しているためであって、個人が決断を変えれば、ただちにライフスタイルは変化するか、あるいは別のライフスタイルが使われるかするでしょう。

● 道徳の問題

ここで話をいったんデカルトに戻します。デカルトは、自然の欲望と理性との間の戦いをとりあげ、次のように言います。

われわれのうちにあつてわれわれの理性に反対すると見られるものは、すべて身体に帰すべきなのである。^[7],p.438)

つまり、欲求や感情などが非理性的なものであれば、それは身体、すなわち物質界のもの、あるいは動物的なもの、であって、それを精神界のもの、あるいは唯一人間的なもの、である理性が制御することが、人間の道徳だということです。デカルトのこのような考え方は、ロックやヒュームを通じてフランス啓蒙主義につながり、道徳哲学に強い影響を及ぼし、感性的な欲望を理性的な自我で制御することが道徳の原理になります。この考え方は、ほとんどそのままフロイト

に受け継がれています。フロイトは心理学におけるデカルト主義者なのです。

ニーチェはこのような考え方を激しく批判します。ニーチェの自己は、力への意志であり、すべての既成道徳を否定します。

生そのものは本質において他者や弱者を我がものにする、侵害すること、圧伏することであり、抑圧すること厳酷なることであり、おのれ自身の形式を他に押しつけること、摂取同化することであり、すくなくとも一ごく穏やかに言っても搾取することである。(中略) これは何らかの道徳性や背徳性からでることではなくて、それが生きているからこそであり、生こそは権力への意志だからである。 ([9], p.304)

ニーチェの自己は身体であり、生への意志、力への意志をもって生きています。生きるとは、不可避免的に、環境を自分の都合に合わせて改変することです。つまり、完全なエゴイズムです。この根源的な事実を認めない道徳のことを、ニーチェは畜群道徳とか奴隷道徳とか言って軽蔑します。

アドラーはニーチェほど過激ではありませんでしたが、それでもなおすべての行為が個人の目標追求のための手段であるから、道徳的な行為も、本質的には利己的であって、利他的に見えるのは見せかけであるにすぎないことを認めます。そうであってもなお、結果的に共同体にとって有益な行為を選択するようにアドラーは勧めるのですが、そういう行為を選択したからといって、動機が自己中心的であることには変わりはありません。

つまり、デカルト的な、理性による欲望の克服という道徳哲学は、根源のところに欺瞞を含んでおり、いまや真面目に取り上げることができませんが、しかしニーチェ的な、生の全面肯定から出てくる道徳哲学には、どこまでいっても人間が私利私欲でしか動くことができず、すべての善が結局は偽善だという苦しさがつきまとうのです。この問題は最後にもう一度とりあげます。

3. ベイトソンと絶対的全体論

● 死んだ世界から命ある世界へ

デカルトの自我が、極小化された自我自身を除いて、残りのすべてを物質界に属するものと考えて、世界をいわば無機質化したのに対して、ニーチェの自己は、全体としての個人を有機体的にとらえなおすことを可能にしました。それゆえ、ニーチェの考えを、デカルトの機械主義に対して、人間主義と呼ぶことができると思います。しかし、ニーチェの自己は世界を力によって征服しようとする自己であり、世界を無機的な物質的なものととらえている点では、デカルトと変わるところがありません。その結果、道徳的な側面で問題を生じました。

グレゴリー・ベイトソン (Gregory Bateson) は、世界を有機的なシステムとしてとらえる考え方を提唱しました。図4は、ベイトソンがあげている例ではありませんが、アズキゾウムシという昆虫と、それに寄生するコマユバチという昆虫とを、実験室で飼育したときの個体数の変動です。アズキゾウムシが増えると、それを食べるコマユバチも増えますが、コマユバチが増えすぎるとアズキゾウムシが減って、その結果コマユバチも減ります。コマユバチが減るとまたアズキゾウムシが増えます。このように、相互作用の中で自動調整機構がはたらいて、両方の個体数は波打ちながら安定します。このようなシステム全体がひとつの生きものであり、ある意味での精神を持っていると考えてもかまわないと、ベイトソンは主張します。そのような精神を、個体が持つ

図4 2種の昆虫の個体数の変化 (^[11],p.142)

ている精神と区別するために、《精神》(英語で "Mind" と、引用符付き大文字で書かれますので、以下このように書くことにします) といいます。

《精神》は、ある種のシステムがもっている特徴で、ちょうど動物や人間の精神のように、思考し、学習し、進化するプロセスです。ベイトソンは、システムが《精神》を持つために満たすべき規準を、以下のように整理しました。

- (1) 《精神》とは相互作用する部分(構成要素)の集まりである。
- (2) 《精神》の各部分間の相互作用の引き金は、差異によって引かれる。
- (3) 《精神》過程はエネルギー系の随伴を必要とする。
- (4) 《精神》過程は、再帰的な(あるいはそれ以上に複雑な)決定の連鎖を必要とする。
- (5) 《精神》過程では、差異のもたらす結果を、先行する出来事の変換形(コード化されたもの)と見ることができる。
- (6) 変換プロセスの記述と分類は、その現象に内在する論理階型のヒエラルキーをあらわす。^[3],p.126)

ずいぶん難しいことが書いてありますが、ベイトソンがイメージしているのは、たとえば先ほどの異種の昆虫が作り出すシステムのようなものです。《精神》をこのように定義すると、生態システムも社会システムも《精神》を持った生きものということになります。さらには無機物を含めた地域全体をも、さらには地球全体あるいは宇宙全体をも、ひとつの《精神》をもった生きものだと考えることができます。

しかし、これは神秘主義ではありません。モーリス・バーマン(Morris Berman)は、次のように書いています。

ベイトソンの思考方法にあつては、《精神》は物体とまったく同じに現実である。そして《精神》は、宗教的原理でもなければ生氣論的な生命力でもない。現実の外に超越して存在する神秘的な何かではないのだ。^[4],p.274)

システムを構成する要素は、たとえば木材や金属や、あるいは人間や犬や、あるいは原子や分子などのありふれた物質なのであって、その他に何か神秘的なものが存在するわけではありませぬ。ありふれた物質がある形で組み合わせられたとき、そこに「思考」とか「学習」とか「進化」と呼ぶほかはない、精神的な特徴が現れ出るのであります。こうして、世界は有機的なもの、生命を持

デカルトの世界観	ベイトソンの世界観
事実と価値は無関係	事実と価値は不可分
自然を支配することが目標	叡智・美・優雅が目標
精神と身体、主体と客体は別のもので分離している	精神と身体、主体と客体は同じプロセスの2つの側面
物体と運動のみが現実	プロセス・形・関係が現実
全体は部分の集合	全体は部分にない特性
自然は死んでいる	自然は生きている

図5 デカルトとベイトソンの世界観^[4],pp.275-276)

ったもの、さらに精神を持ったものとして見直されます。しかも、超自然的な神秘的な前提は必要がありません。バーマンは、デカルト的世界観とベイトソンの世界観を図5のように比較対照しています。

• ライフスタイル論の未来

アンスバッハーは次のように述べています。

アドラー心理学は一貫して人間学的であって、物理学、化学、あるいは動物（おとぎ話の擬人化された動物を除く）による比喩を拒否する。^[2],p.789)

アドラーはデカルト的な古典科学を断念して、個人の主体性の方を選択したのです。心理学者のある人たち、たとえばユング(Carl Gustav Jung)やロジャーズ(Carl Rogers)など、は、デカルト的な機械主義に反発して、人間は古典科学では分析できないと言い、非科学的な、場合によっては神秘的な方法に頼ることにしました。しかし、アドラー心理学は、たとえばライフスタイル分析を、きわめて実証的かつ論理的な方法でおこないます。つまり、人間像についてはデカルト的な見方を拒否しつつ、実践においてはときにデカルト的な方法を用います。アドラーは方法としての古典科学を捨ててしまっ、ユングやロジャーズのような神秘主義に飛び込んだのではありません。創造する自己である個人は、必要があれば古典科学的な思考を使うことができるからです。(図6参照)

ライフスタイル分析は、客観的に観察できる材料から論理的に推論して因果法則を発見するという、デカルトが言うところの物理法則の考え方に則しておこなわれます。しかし、アドラー心理学は、ライフスタイルが物質界に所属するので物理学的に分析できると主張しているのではありません。そうではなくて、ライフスタイルは「どのように」個人が動くかを法則化したものであって、「どのように」という問いに対しては、古典科学的な方法が使えると考えているのです。しかし、「なぜ」という問いについては、使うことができません。個人が「どのように動くか」については、自然科学的な方法で説明することができるのです。しかし、そもそも個人とはいったい「なに」であるかは、自然科学の説明の範囲の外にあります。アドラー心理学はデカルト的な古典科学を方法として使うことがあっても、その人間観についてはニーチェ的であって、物質

一元論	中世	神秘主義	デカルト 以前	ユング ロジャース
要素論	近代	機械主義	デカルト	フロイト
相対的全体論	現代	人間主義	ニーチェ	アドラー
絶対的全体論	未来	生態主義	ベイトソン	?

図6 臨床心理学各派の位置

科学的な考え方に頼ることをしないのです。

バーマンは、

諸要素を孤立させるデカルト的分析とは、世界の大半を学ばないための一方法にほかならない。相互に反応しあう諸要素が集まった全体のみが《精神》でありうるからだ。^[4],p.289)

と言っています。心理学を古典科学の見方だけで割り切ろうとするのは、神秘主義に走るのと同様に、個人の生命なり精神なりを見落としていることになるのです。しかしながら、

(ベイトソンの提唱する世界観は) 科学的知そのものを批判するものではない。ただ、科学的世界観の、自らをより大きなコンテキストの中に位置づけることができないという一点を批判するのである。^[4],pp.394-395)

とも言って、古典科学的な方法を否定しているわけでもありません。ただ、その適切な使い道を定めたいだけなのです。

さて、最初に掲げた疑問、「《私》とは個人のことだろうか、ライフスタイルのことだろうか」への答えは、古典的なアドラー心理学では、「統一的な全体としての個人が私である」ということです。しかし、その個人は、もっと大きなシステムの生命の一部であり、個人の精神も、もっと大きな《精神》のサブシステムであるにすぎません。生命は、個人の中にあるのではなくて、地球生態系全体の中であって、その一部分をわれわれが分かち与えられている、というのが、ベイトソンの、あるいは絶対的全体論的、あるいはスピリチュアルなアドラー心理学的な答えです。私は、ライフスタイルでもなく個人でもなく、世界の《精神》の一部なのです。

そこでは、ライフスタイルを、デカルト風の単一の変化しない自我だと考えることができないのはもちろん、ニーチェ風に、個人が決断して変化しないように保っているものだと考えることもできません。ライフスタイルが同一に保たれているとすれば、環境世界がそれを同一に保つことを許しているからで、環境世界がライフスタイルの変容を迫れば、個人はそれに応じてライフスタイルを変容させるでしょう。その極端な例が洗脳です。ある特殊なカルト団体に加入した人がすっかりライフスタイルを変えてしまうのは、ライフスタイルが環境との相互作用の中にあることをよく示しています。

次の時代のアドラー心理学では、ライフスタイルは同一性を保つ不変のものだとは考えられなくなるでしょうし、ひとつだけしかないとも考えられなくなるでしょうし、さらには個人が所有しているものだとさえ考えられなくなるでしょう。スタレを二つ重ねたときにあらわれる縞模様をモ

アレの格子といますが、ちょうどそのように、個人と環境との相互作用の中にライフスタイルが《精神》として浮かび出るのは、そうなる、それを古典科学的な方法で分析することは、それほど重要なことではなくなるだろうと思います。

• 個人の道徳から全体の道徳へ

ニーチェに関する節で暗礁に乗り上げていた道徳の問題について補足しておきます。個人はより大きな生命システムの一部です。しかも、個人が先にあってより大きな生命システムが個人の集合体として形成されるのではなく、あらかじめ大きな生命システム（たとえば地球、たとえば生態系、たとえば人類）があって、その中に個人が産み出されるのです。

アンスバッハーは、アドラー心理学について次のように述べています。

アドラー心理学は一貫して全体論的であり、人を分割できず個別的であるだけでなく、同朋の人々のより大きなシステムの中がんにがらめに組み込まれた、そのような個人であるとみなす。^[2],p.788)

「より大きなシステムの中がんにがらめに組み込まれた (inextricably embedded)」ということ、ベイトソンであれば、「世界の《精神》の構成要素である《サブ精神》として」と言うかもしれない。人間は、世界から孤立した個人ではなくて、世界に完全に組み込まれた一部であるにすぎません。

ここから、ひとつの倫理的な規準が出てくると思うのです。つまり、世界のバランスを保つことが人間の使命だということです。あるいは、世界のシステムの中で果たすべき役割を果たすと言ってもいいかもしれません。もはやデカルトのように「自然の主人か所有者」になることなどできないし、ニーチェのように、「世界を力によって制服する」こともできないのです。それは原理的に不可能です。たとえば、財宝を載せた船に乗っていて、すべての財宝をわがものにしようと自分の側に引き寄せると、船がバランスを失って沈んでしまうようなものです。

現代社会は、いまなおデカルト主義を信奉していますが、バーマンによれば、それはフィードバックを欠いた暴走するシステムです。しかし、「社会が悪いから社会が改まるまではどうしようもないのだ」というのは、アドレリアンらしい態度ではありません。「新しい社会に向かって私にできることをする」ということでなければならぬと思います。ではその「私にできること」とはなんであるのか。それがまだよくわからないでいます。今後の課題として今は残しておくほかありません。

4. まとめ

アドラー心理学の個人とライフスタイルの概念をめぐって、デカルト・ニーチェ・ベイトソンの思想との関係を考えました。デカルトとニーチェについては、ほぼ必要なことを書き尽くしたと思うのですが、ベイトソンや絶対的全体論については、なお考えるべきことが多くあると思います。それについては稿を改めて、いつか書くことがあると思います。

文献

- [1] Ansbacher, H. L. and Ansbacher, R. R. (1956): *The Individual Psychology of Alfred Adler*, Harper, New York.
- [2] Ansbacher, H. L. (1974): Individual Psychology. In Ariteti, S. ed : *American Handbook of Psychiatry*. Basic Books, New York.
- [3] Bateson, G. (1979): Mind and Nature. (ベイトソン著, 佐藤良明訳 : 『精神と自然』新思索社)
- [4] Berman, M. (1981): The Reenchantment of the World. (バーマン著, 柴田元幸訳 : 『デカルトからベイトソンへ』国文社)
- [5] Descartes, R. (1637): Discours de la Methode. (デカルト著, 野田又夫訳 : 「方法序説」, 『世界の名著 : デカルト』中央公論社)
- [6] Descartes, R. (1640): Meditation de prima philosophia. (デカルト著, 井上庄七・森啓訳 : 「省察」, 『世界の名著 : デカルト』中央公論社)
- [7] Descartes, R. (1649): Passions de l'âme. (デカルト著, 野田又夫訳 : 「情念論」, 『世界の名著 : デカルト』中央公論社)
- [8] Nietzsche, F. W. (1885): Also sprach Zarathustra. (ニーチェ著, 吉沢伝三郎訳 : 『ツァラトゥストラ』ちくま学芸文庫)
- [9] Nietzsche, F. W. (1886): Jenseite von Gut und Böse. (ニーチェ著, 信太正三訳 : 『善悪の彼岸』ちくま学芸文庫)
- [10] Nietzsche, F. W. (1906): Der Wille zur Macht. (ニーチェ著, 原佑訳 : 『権力への意志』ちくま学芸文庫)
- [11] 日本生態学会編 : 『生態学入門』東京化学同人
- [12] 野田俊作 : 「多重人格モデルのアドラー心理学」, 『アドレリアン』 15(3), 197-207

更新履歴

2013年2月1日 アドレリアン掲載号より転載